

---

# まだ、雨はやまなくて。

海田 陽介

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

まだ、雨はやまなくて。

### 【Nコード】

N7815C

### 【作者名】

海田 陽介

### 【あらすじ】

大学を卒業してから植栽関係の会社で働いているわたしは、買い物をした帰りにはったり大学時代の友人と再会する。そしてその友達のうち遊びに行つて色々思い出話をしているうちに、ふと会話は最近別れたばかりの恋人の話になって……。二十代後半にさしかかろうとしている男女の何気ない日常や思いや希望といったことが、この小説のテーマです。

まだ、雨はやまなくて。

## 優しい夜と孤独

ふいに、何かが頬を濡らした。

最初それは自分の涙だと思ったのだけれど、でも、それは違って、雨だった。

とうとう降り始めたんだ、と、わたしは思った。雨が。

わたしは歩みを止めると、空を見上げてみた。

空には灰色の絵の具を水に溶かして薄めたような雲が広がっている。

わたしは右手を宙に差し出して手のひらを表に向け、その舞い落ちてくる小さな水の粒を受けてみた。

すると、手のひらに、雨粒の、哀しいような冷たさが、とても静かに広がっていった。

まだ、雨はやまなくて。

「わかちゃんがうちに来たのってめっちゃ久しぶりやね。」

と、かよちゃんは楽しそうに微笑んで言った。

「そういえばそうやなあ。」

と、わたしも微笑みながら、フローリングの床の上に腰を下ろした。

実際に、彼女の家に遊びに来たのは随分と久しぶりのことだった。

最後に来たのはいつだろうと考えて、よく思い出せなかった。たぶんもう三ヶ月以上前のことだ。社会人になって働くようになったから、学生のときの友達と遊ぶ機会はめっきり少なくなってしまった。

仕事が忙しくてなかなか時間の都合がつかないということもあつたけれど、でもそれ以上に、みんなそれぞれ生活の基盤となる場所が変わってしまったような気がする。何か特別なことでもない限り、みんなで集まることはなくなってしまった。今日かよちゃんの家に遊びに来ることになったのも、べつに前もって約束をしていたわけではなくて、買い物をした帰りに、街でばったり彼女と顔を会わせただからだった。

かよちゃんは自分の荷物を置くと、とりあえずという感じでテレビをつけた。すると、部屋のなかに賑やかな笑い声が溢れた。なんとなくテレビの方に視線を向けてみると、今テレビではバラエティ番組がやっていて、見たことのないお笑い芸人が何かコントのようなことをやっていた。テレビのなかの観客がどつと楽しそうな笑い声をあげて、その笑い声を聞いていると、よくわからないけれど、ほっとくつろいだ気持ちになれた。

「わかちゃん何か飲む？」

と、少し経ってから、かよちゃんがふと気がついたように言った。

「いい。そんな気をつかわんでも。」と、わたしは答えただけれど、彼女はそんなわたしの言葉を聞き流して、それまで座っていたフロアリングの床から立ち上がると、玄関と一体化しているキッチンの方まで歩いていった。

そしてそこで立ち止まって、わたしの方を振り返ると、

「紅茶とコーヒーやったらどっちがいい？」  
と、訊いてきた。

わたしは少し迷ってから、「じゃ、コーヒーで。」と、答えた。  
かよちゃんは、「了解。」と言って微笑むと、コーヒーメーカーを準備して、コーヒーをいれる準備をはじめた。

しばらくすると、コーヒーメーカーから蒸気の吹き出る音が聞こえてきて、そのあとにガラスビンに抽出されたコーヒーの溜まっていく音と、コーヒーのいい香りがふんわりと漂ってきた。

わたしは彼女がコーヒーを入れてくれている間、べつに意味もななくぐると彼女の部屋を見回してみた。

かよちゃんが一人暮らしをしている部屋は、全体的に白で統一されたシンプルな部屋だ。六畳もないくらい部屋なのに、空間の使い方が上手なせいで、あまり窮屈な感じを受けない。ほぼ正方形に近い形をした部屋の右隅にベッドがあつて、その反対側にはスチールラックがある。ラックには、テレビとかコンポとか雑誌とか絵本とか、その他細々としたものが綺麗に整頓されて並べられている。ラックとベッドの間くらいのスペースに、白くて丸いデザインの、かわいらしいテーブルがひとつ置いてある。ベッドの後ろには鏡台があつて、その反対側にはタンスがある。化粧台とタンスの向こう側はベランダになっていて、そのベランダの前には無地で白のカーテンがかかっている。

突然のわたしの訪問にもかかわらず、彼女の部屋は綺麗に片付けられていて、わたしの部屋とは大違いだな、と、わたしは感心してしまった。

「できたよ。」と、言って、やがてかよちゃんがコーヒーの入ったマグカップをふたつ持って戻ってきた。マグカップは赤と黄色の可愛い感じのもので、そのマグカップのふちの内側には、フランス語

まだ、雨はやまなくて。

で、こんにちは。楽しいひとときをどうぞ、というようなが書かれてあった。

「砂糖とかミルクとかいる？」と、かよちゃんはテーブルの上にマグカップを置くと言った。「あ、大丈夫。」と、わたしは微笑んで答えると、そのままコーヒーを一口啜った。かよちゃんも何も入れずに口に含んだ。

かよちゃんのいれてくれたコーヒーは濃くがあつて、すごく美味しかった。わたしがそう言つと、彼女は少し嬉しそうに笑つて、「このコーヒー豆、スターバックスで買ってきたやつやねん。」と、いくらか得意そうに教えてくれた。

わたしとかよちゃんは少しの間テレビを見るともなく見ながら無言でコーヒーを啜った。しばらくするとテレビ画面を眺めていたかよちゃんが、「あのひと、誰かに似てるなあって思ったら、太陽に似てるなあ。」と、可笑しそうに笑いながら言った。

彼女に言われて今テレビに映っているその若いお笑い芸人のひとの顔をよく見てみると、なるほど、彼女のいうとおり、そのひとは学生時代の友人である太陽にそっくりだった。

「ほんまや。」と、わたしが笑いながら頷くと、かよちゃんもつられるように少し笑つて、「あれもしかしてほんまに太陽なんちゃう？」と、冗談で言った。

「太陽いつの間に転職したん？」と、わたしも楽しくなつてきて言った。

まだ、雨はやまなくて。

「だけど、最近太陽どうしてるんやろ。」  
と、かよちゃんはちよつと真面目な表情に戻つて言った。

「わかちゃん、最近太陽にあつた？」  
と、かよちゃんはわたしの方を振り向くと訊いてきた。  
「うっん、全然会ってへん。」と、わたしは小さく首を振って答えた。

太陽に最後に会ったのはいつだろうと考えているうちに、急に太陽のことが懐かしくなってきた。学生の頃はほとんど毎日のように会っていたのに、最近では滅多に会えなくなってしまった。太陽や他のみんなに最後に会ったのは、もう三ヶ月以上前のことだった。そう思うと、急に何だか少し寂しいような気持ちになった。

「太陽、あれから新しい仕事先見つかったんかなあ」  
と、かよちゃんはコーヒを一口啜ってから言った。

「さあ、どうなんやる。」と、わたしは曖昧に返事を返した。  
太陽は大学を卒業したあと小さな建築事務所に就職して働いていたのだけれど、最近、その会社を辞めて無職になっていた。太陽の話では、会社の経営状態が思わしくなくて、辞めてもらえないかと社長に頼まれたのだということだった。

「でも、しばらくはゆっくりするって言ってたから、まだ何もしてないんちゃう？」

と、わたしは少し考えてから言った。「働いてるときは休みがなくて、自分のしたいこと何もできひんかったから、しばらくはゆっくりしたいみたいなこと言ってた気がする。」

「そっかー。」と、かよちゃんはわたしの言葉に頷くと、少しの間黙って何か思いを巡らせている様子だったけれど、やがて、「だけど、うちらもう二十五になるんやね。信じられへんわ。」と、しみじみとした口調で言った。

「そっやね。」と、わたしは苦笑するように微笑にして頷いた。

まだ、雨はやまなくて。

高校生ぐらいの頃は、自分が二十五歳になるなんて想像することすらできなかった。でも実際になってみると、案外あつけないものだった。ちよつとあつけなさすぎるくらいだった。年齢だけが、どんだん勝手に一人歩きをしていくという感じがあつた。ほんの昨日まで十九とか二十歳だったのに、ある日突然、はい、じゃあ明日から二十五歳です、と言われたような、そんな唐突で理不尽な感じすらあつた。

「・・・この前な、高校のときの友達の結婚式があつてん。」

と、かよちゃんも少し経ってから、ふと思いついたように言った。「・・・女の子の友達なんやけどな、その子、高校のときの同級生の子と結婚してん。それでな・・・。」

と、かよちゃんはそこまで口にしてから、ちよつと躊躇うに、何かを確認するように、わたしの顔をちらりと振り返った。そして一呼吸ぶんくらい間をあけてから言葉を続けた。

「それでな、結婚式には他にも高校のときの同級生の子が一杯きててな・・・それでそのなかに、わたしが高校のとき片思いしてた子もおつてん。」

彼女はそう言うてから、少し恥ずかしそうに小さく笑った。

「べつに今はなんとも思つてないで・・・けどな、ちよつとその当時のことを思い出してな・・・なんかよくわからへんねんけど、めっちゃ切なくなつてしまった。」

「そんなことがあつたんや。」と、わたしは曖昧に微笑して頷いた。そして頷きながら、わたしにも高校のとき似たようなことがあつたな、と、懐かしさと切なさが入り混じつたような複雑な気持ちになつた。

まだ、雨はやまなくて。

高校生のとき、わたしにはひとつ年上の好きなひとがいた。でも、そのひとにはもう恋人いて、わたしの気持ちは届かないままに終わってしまった。そのひとは今頃どうしているのだろう、となんとなく思った。ひよっとすると、かよちゃんの友達と同じように、もう結婚していたりするのかもしれない。

「せっかく再会したんやから、思い切って声かけてみたら良かったのに。」

と、わたしは冗談めかして言ってみた。「今度ふたりで遊ぶ約束するとか。」

すると、かよちゃんは、「そんなの無理やわ。」と、恥ずかしそうに笑って、「それにその子、彼女おるって言ってたし。」と、続けて言って微笑した。

「そつか。それは残念やな。」

と、わたしもかよちゃんの笑顔に誘われるようにして微笑して、コーヒーを一口啜った。

それから、僅かな沈黙ができて、その沈黙なかにテレビの音がくつきりと浮かびあがった。すごくタイムリーなことに、テレビでは結婚式場のコマーシャル流れていた。

「・・・わかちゃんはもう大丈夫なん？」

と、いくらかの沈黙のあとで、かよちゃんはわたしの方を振り向くと、ちよつと遠慮がちな声で言った。

わたしがなんのことだろうと思って彼女の言葉の続きを待っていると、彼女は、

「・・・加藤くんのこと、もう大丈夫なんかなあっと思ってな。」  
と、少し小さな声で言った。

まだ、雨はやまなくて。

わたしが咄嗟のことに何も言葉を発せられずいると、かよちゃんは更に言葉を継いだ。

「・・・もし、嫌なこと思い出させてしまったんやったらめっちゃごめんな。でも、わかちゃん、別れたばかりのときすごく落ち込んでたし・・・あれから少しは落ち着いたんかなって思っただけ。」

「うん、もう大丈夫やで。」と、わたしはかよちゃんの言葉にいくらか無理に微笑んで答えた。「・・・別れたばかりのときは、長い付き合いやったし、すごく落ち込んでしまったけど、もう大丈夫。そんなに思い出したりしんなくなってきた。」

「・・・そっか。それやったらいいんやけど。」と、かよちゃんはちよつとの間心配そうにわたしの顔を見つめていたけれど、やがて頷いた。そして少し間を空けてから、「でも、何か話したいこととかあったらいつでも言っただけ。」と、付け加えるように言った。「何もしてあげられへんけど、話聴くことぐらいやったらできると思うし・・・。」

「・・・ありがとう。」と、わたしは言った。でも、そう言ったわたしの言葉は、いくらかぎこちなく部屋の空気を震わせていった。

わたしは今から三ヶ月程前に、約四年半付き合ってた恋人と別れた。そのひとは結婚するつもりでいて、実際に婚約までして、お互いの親にはもう挨拶をすませて、あとは結婚式をあげるだけというところまでいっていた。ふたりで結婚式はどんなふうにしたいとか、そういう話し合いをして・・・そういう話し合いをしているのはすごく楽しくて・・・でも、それなのに、些細な考え方の違いから喧嘩になって、言い合いになって、最後には、ふたりの関係は完全に壊れてしまった。

まだ、雨はやまなくて。

・・・どうしてそんなことになってしまったのだろうと思う。でも、たぶん、わたしが悪かったのだ。今なら少しは冷静に自分間違いを認めることができる。たぶん、わたしは彼の愛情に甘え過ぎてしまっていたのだ。

ちよつとぐらい我が儘を言っても、彼はわたしの意見を全部受け入れてくれると思ひ込んでいた。でも、そのときの彼はいつも違って、わたしの考えを、わたしの我が儘を、なかなか受け入れてくれようとはしなかった。

そして、わたしは自分の我が儘を受け入れてくれない彼に対して、腹を立てた。

でも、ほんとうはそんなことはすべきじゃなかったのだ。わたしの方が彼に謝らなければならなかった。そんなことはちよつと考えればわかりそうなものに、でもそのときのわたしはすごく興奮していて、自分のことばかり考えてしまっていて、そのことに気がつくことができなかった。そして気がついたときには、もう、わたしは彼を失ってしまったていた。

・・・わたしはまだ彼のが好きだし、できることならもう一度やり直したいと思うけれど・・・でも、それは不可能なことだ。あんなひどいことを言ってしまったのだから・・・今更彼が許してくれるはずがない・・・だから、諦めるしかない・・・それはわかっているのだけれど・・・わかっているはなんだけれど・・・。わたしの思考は同じところをグルグル回る。でも、出口は見つからない。

「・・・元気だしてな。」と、わたしが黙っていると、わたしに気を使ったのか、かよちゃん優しい声でそう言ってくれた。わたし

まだ、雨はやまなくて。

はありがとうと答えただけで、そう答えたわたしの声は、彼女の言葉が嬉しかったのと、彼のことを思い出して悲しくなってしまうのと、泣き笑いのような変な声になってしまった。

そのわたしの声を聞いてかよちゃんは少し可笑しそうに口元を綻ばせると、それからすぐに優しい笑顔で、「わかちゃんにはまたすぐにはいいひと見つかるって。」と、明るい声で慰めてくれた。

「ありがとう。」と、これで何回目になるともなくわたしは彼女にお礼を言った。

「かよちゃんにもすぐにいいひと見つかるで。」と、わたしがお返しのようにそう言うのと、かよちゃんは軽く笑って、「そうやってほしいもんやわ。」と、おどけて答えた。

かよちゃんも一年くらい前に付き合っていたひとと別れてからずっとひとりであるみたいだった。

「・・・お互いなかなか上手いかへんもんやな。」  
と、わたしは少し間隔をあけてから苦笑まじりに言った。すると、かよちゃんもつられるようにして小さく笑って、「そうやね、と、頷いた。」

また沈黙ができて、テレビの音がやわらかくその沈黙の輪郭を縁取っていった。ふと部屋の時計に目をやってみると、いつの間にか時刻は夜の九時半を回ろうとしていた。

「かよちゃんは明日仕事？」  
と、わたしはかよちゃんの横顔に視線を向けてからなんとなく尋ねてみた。すると、かよちゃんは口にしていないマグカップをテーブルの上に戻してから、「うん。」と、短く頷いた。

まだ、雨はやまなくて。

「明日は九時から仕事やね。」と、彼女はちよつと憂鬱そうに眉をしかめて言った。かよちゃんは大学を卒業したあとアロマセラピー関連の会社に就職したのだけれど、人間関係のごたごたとか色々あってその会社を辞めて、今はアルバイトで入った花屋さんで契約社員という形で働いていた。

「わかちゃんも明日は仕事？」

と、かよちゃんはわたしの方を振り返ってそう尋ね返してきた。

わたしは彼女の言葉にうん、と頷いてしまつてから、急に明日働くことが億劫になつてきた。わたしは大学を卒業してから、植栽関係の会社で働いている。わたしの働いている会社はまだ比較的きちんと土日休みがもらえる方ではあるけれど、それでも毎日のように残業になつてしまふし、義務とか目標とか、そういうことに追われて、ときどきうんざりしてしまうことがあつた。

「・・・もつとゆっくり時間があつたらいいんやけどなあ。」

と、わたしが冗談まじりに言うと、かよちゃんは軽く微笑して、そうやね、と頷いた。そしてそれから、「もしゆっくり時間があつたら、またみんなでどっか旅行に行きたいよな。」と、静かな口調で言った。

「そうやね。」と、わたしは曖昧に微笑して頷きながら、でもきつとそんなふうにゆっくりできる時間は、これから先どうぶん来ないんだろうな、と、諦めるように思った。そしてそう思うことは、何がどうということもなく、少し、寂しいような気がした。

まだ、雨はやまなくて。

## わたしのこれからは

・・・ときどき、ふいに、何の脈絡もなく、寂しくなってしまうことがある。

まるで道を歩いていたら、突然落とし穴に落ちてしまったみたいに。そしてその寂しさは、決して大げさな言い方とかではなく、両腕で自分の身体を抱きしめて蹲っていなければ耐えられないような、凍えるような、極端に激しいものだったりする。

何がそんなに寂しいのか、自分でもよくわからない。長く付き合い合ったひとを失ってしまったということが、少しは関係しているのかもしれないけれど、でもそれだけが原因じゃなくて、何かもつとべつの、たとえばわたしの存在そのものに起因するよう何かが、その寂しさと深く関係していような気がする。

・・・でも、ほんとうは、寂しい、と思ってしまう感情なんて、笑い飛ばしてしまえたらいいのだけれど。寂しいなんていう感情は、結局のところ、たぶん、わたしが甘えているから、そう感じてしまうのだから。

・・・寂しいなんて思っている暇があったら、もつと少しでも、何か自分のためになるようなこと、あるいは誰かのために何かできることをすべきなのだ。・・・でも、そうわかっていても、どうすることもできない。

まるで突然の雨降りみたい、ポツリと舞い落ちてきた寂しさの雫は、あっという間に土砂降りの雨みたいになって、みるみるうちにわたしの心の表面を寂しさで濡らしていく。そして一度降り出し

まだ、雨はやまなくて。

た雨は、梅雨の雨みたいに長く降り続いてなかなか止まない。止んだと思ってもまたすぐに降り出してしまふ。わたしの心はいつまでもその寂しさに捕らわれてしまふ。

朝起きると、まず洗面所で歯を磨いて顔を洗う。そして部屋のカ―テンを空けて、それからベランダで育てている朝顔に水をあげる。

わたしはほんの数日前からベランダで朝顔を育てはじめた。

朝顔は土のなかから芽を出したばかりで、まだほんの小さな生命の欠片に過ぎない。この生命の欠片が成長してやがて綺麗な花を咲かせるのは、当然先のことだ。・・・一体何色の花が咲くのだろう。赤だろうか、それとも黄色、もしくは青、花が咲くのはまだまだ先のことなのに、今から花が咲いたときのことを思うとすごく楽しみだった。

まだ、雨はやまなくて。

わたしが朝顔を育ててみようと思ったのはほんの思いつきからだった。小学校のとき、朝顔を栽培する授業があつて、そのとき、ほかのみんなの鉢植えには色とりどりの綺麗な花が咲いたのに、自分の鉢植えにだけは何の花も咲かなかった。そのときのことをなぜか急に思い出して、それでふと育ててみようと思いついたのだ。

黄色のジヨウロに少し水を入れてベランダに出ると、どんよりと曇った暗い空が見えた。この調子で行くと、今日のお昼頃には雨が降るのかもしれない。

まだ生まれたての朝顔の芽に、そつとやさしく、大切な友達に話しかけるように、ふんわりと水をかけてあげる。すると、頭から水を浴びた彼女は、わたしの顔を見つめて、ありがとうと嬉しそうに微笑んでいるようにも思えた。

朝顔に水をあげたあとは、朝食を作る。といつても時間もないし、面倒でもあるので、いつも大抵トーストを二枚焼くだけだったりする。

トースターで軽く焦げ目がつく程度に焼き上げると、それにバターだけを塗って食べる。ときどきジャムや蜂蜜をかけて食べたりもする。それと一緒にコーヒーか紅茶をつけるのだけれど、今日は曇っているから何となく紅茶が飲みたい気分で、ミルクティーにすることにした。赤い薬缶に少し水を入れて、電気コンロでお湯を沸かす。お湯が沸いたら、マグカップにその沸いたお湯を注いで、そのあとにティーバックの紅茶を入れる。今日はこの前買った桃の香りのする紅茶があっただのでそれにして、そのティーバックをちよつと長めにお湯につけておいたあとに、ポーシヨンミルクをひとつ入れる。

朝食をすませると、パジャマから服に着替えて、化粧をして、仕事に出かける。

わたしがひとり暮らしをしているアパートから駅までは徒歩で十分くらいの距離で、その駅から電車で三十分ほどいったところに、わたしの働いている小さな会社はある。

まだ、雨はやまなくて。

その会社は、植物を育てて、その育てた植物を花屋さんとか、他の植物を扱うお店に卸したり、庭のデザインとかをしたりする会社だ。小さな会社だから、まだ若くて経験のないわたしにも大きな仕事を任せてくれるし、それなりにやりがいもあつて楽しかったりもするのだけれど、でもそのぶん大変だったり、体力的に辛かったりもして、今の仕事に満足しているような、していないような、よくわからない気持ちになってしまう。

でも、一番問題なのは、わたしがどうしてもこの仕事がやりたいと思っっているわけではないということだ。とりあえず今はいいとしても、わたしはこの仕事をずっと続けて一体どうするのだろう、どうしたいのだろう、と、ときどき自分のなかにそんな疑問の声が浮かんできってしまう。かといって、今働いている会社を辞めてどうしたいというような具体的な目標もなく、やってみたいなと思うことはあつてもそれは漠然としていて、そのために積極的に努力していかうとか、計画を立ててどうこうということまではなかなか気が向かわなかつたりする。・・・将来のことを考えると、やっぱりかな行き止まりにぶつかってしまったような、苦しいような、不安なようなそんな気持ちになってしまう。

朝会社に着くと、とりあえずパソコンをつけてメールをチェックする。そしてそのあとは見積もり書の作成をやつて、そのついで伝表の整理や、書類の作成を途中までやつてしまう。そのあとはちょっとした会議というか、打ち合わせみたいなのがあつて、それが終わったら今度は植物を育てている現場に行つて植物の世話をする仕事がある。

そういった一連の仕事が終わるのはだいたいいつも夕方の六時過ぎごろで、そのあとはまた会社に戻つて、今度は次の仕事のための

まだ、雨はやまなくて。

準備や、わたしが担当することになっているホームページの更新の仕事や、次の会議のための書類の作成や、計画表の作成等があったりして、全部の仕事が終わって家に帰るのはだいたい十時を過ぎることが多い。

いくら残業をたくさんやっても、ある一定量ぶんの手当でしかつかないから、ほとんどただ働きのような状態で、みんな帰って誰もいなくなった会社にひとり残って仕事をしていると、ときどきわたしはこんなところでひとりで一体何をやっているのだろう、と、泣き出したいような哀しい気持ちになってしまうことがある。

お昼を過ぎると、思っていた通り雨が降り始めた。それは激しくも降らなければ弱くも降らない、冷たい雨だった。

太陽から携帯に電話がかかってきたのは、わたしが仕事を終えて帰る仕度をしているときだった。今近くに池ちゃんと一緒にいるのだけど、もし良かったらわたしも来ないか、という誘いの電話だった。池ちゃんというのは、わたしが大学のとときに太陽を通じて知り合った同い年の男友達だ。

わたしはその太陽の誘いを聞いてどうしようかなと思った。何しろ今日は朝から仕事で疲れていたし、明日は明日で朝から仕事あるからだった。でも、少し悩んだ末に結局行くことに決めた。太陽と池ちゃんのふたりとはもう長いこと会っていないかったし、この機会を逃してしまったら、また次に会えるのはいつになるかわらからな

まだ、雨はやまなくて。

いと思った。

明日は朝から仕事があるけれど、でもその明日を乗り越えれば、次の日が休みでもあったので、まあなんとかなるだろうと判断した。それに、今日という一日が、仕事をするだけで終わってしまうというのは、何だか虚しいような気もした。

雨のなかを透明のビニール傘をさして駅の方まで歩いていく。すると、駅前のバスのロータリー付近に、太陽の（正確には太陽のお母さんの）車である、ワインレッドのミニカーが停まっているのが見えてきた。

車のすぐ側まで近づくと、運転席の窓が開いて、「久しぶりやな。」と、太陽の明るい声が聞こえた。わたしが、「ひさしぶり。」と、答えると、続けて助手席の方から池ちゃんの声も聞こえてきた。

「今日はふたりで遊んでたん？」と、わたしが訊いてみると、太陽は、そうやねん、と、頷いてから、「池ちゃんが寂しい、寂しいって言うからやあ。」と、笑いながら答えた。すると、助手席に座った池ちゃんが、「そんなこと言ってへんやん。」と、ちよつと口を尖らせて答えた。「暇やからって誘ってきたのは自分やろ。」と、池ちゃんは太陽を非難した。すると、太陽は軽く笑って、「え？そうやったけ。」と、とぼけていた。

わたしはそんなふたりのやりとりを聞きながら、微笑ましいような、懐かしいような気持ちになった。

そのあと、わたしたちは太陽の運転する車に乗って、近くのファミリーストランに向かった。席に着くと、太陽と池ちゃんのふたりはハンバーグとライスとドリクバーのセットを注文した。わたし

まだ、雨はやまなくて。

はちょっと迷ってから、みんなと同じドリンクバーと、なすとじつくり煮込んだミートのパスタを注文した。

店員さんがいなくなると、わたしたちはそれぞれドリンクバーに飲み物を汲みにいった。そしてその汲んできた飲み物を飲みながらとりとめもなく話をした。それぞれが覚えていようないないような思い出話から、最近見た映画のことや、近頃やっと暖かくなってきたねというような季節の話・・・ふたりと話すのはほんとうに久しぶりだったから話題が尽きることはなかった。そしてそんなふうな話をしていくうちに、ふと話題は太陽の会社を辞めた話になった。太陽はまだ無職でいるみたいだった。

「まだ当分就職するつもりはないの？」

と、わたしが訊くと、太陽はいくらか困ったように顔をしかめて、「いや、いい加減働かんとヤバイな。」と、苦笑しながら言った。

「今は実家やからいいけど、ずっとこのままっていうのもな。」

「じゃあ、次もやっぱり建築関係で探すの？」

と、わたしが続けて尋ねると、太陽はいくらか思案気味な表情を浮かべて、

「そうだな。たぶん。」と、答えた。「デザインにもちょっと興味あるけど、でも大学でせっかく建築のこと学んだんやし、できればやっぱり建築関係の仕事がしたいよな。」

と、太陽は答えた。

「でも、もし、建築関係の仕事が見つからなかったらどうするん？」

と、池ちゃんが横から口を挟んだ。

「見つからなかったら・・・。」と、太陽は池ちゃんの質問に考え込むような表情を浮かべると、少ししてから、「どうするんやろな。」と、誤魔化すように曖昧に笑って答えた。

「・・・そういうのって、なかなか自分の思い通りにいかへんもんやよな。」

まだ、雨はやまなくて。

と、池ちゃんは太陽のとなりで半ばひとりごとのようにいくらか小さな声で言った。

「池ちゃんは最近どうなの？」

と、わたしは池ちゃんの顔に改めて視線を向けてみた。

すると、池ちゃんはコーラをストローで一口啜ってから、「なかなかやな。」と、少し沈んだ口調で答えた。

池ちゃんは大学を卒業したあと、フリーターをやりながら、公務員になるための勉強を続けていた。

「筆記試験はいけるんやけど、面接で、どうしてもな……。」

「……そっか。」と、わたしはなんて言ったらいいのかわからなくてただ相槌を打った。

「やっぱり難しいんやね……。」

「……俺、そろそろ諦めようかなって思ってたんねん。」と、池ちゃんは少ししてから躊躇いがちに言った。「……もう二十五やしな、早よせんと、就職することすらできひんくなってしまいそうやしな……。」

「……そっか。」と、わたしは池ちゃんの言葉にただ頷くことしかできなかった。太陽も適当な言葉が見つからないのか、黙っていた。

ふと、となりの窓ガラスの外に景色に目を向けてみると、そこには横断歩道が見えた。その横断歩道の信号は、いま青信号から赤信号に変わろうとしているところだった。なんとなく、その点滅する青信号は、まるでわたしたちのこれからを暗示しているようにも思えてきた。

「……だけど、実際、現実は厳しいよな。」

と、しばらくの沈黙のあとで太陽は静かな口調で言った。わたし

まだ、雨はやまなくて。

は窓の外に向けていた視線を太陽の顔に戻した。

太陽は洋服の胸ポケットからクシャクシャになったタバコの箱とライターを取り出すと、そのタバコの箱からタバコを一本取り出して口にくわえた。

「・・・高校くらいときは、今自分がこんふうになってるとは思っ  
てへんかったもんな。」と、太陽は苦笑しながらそう言うと、口  
にくわえていたタバコに思い出したようにライターで火をつけた。  
「よくわからへんけど、二十五歳の自分はもつとすごくなってるっ  
て漠然と思ってたな。」と、太陽は自嘲気味に微笑しながら言った。  
「建築家になるのは無理でも、もうちょっといけると思ってたん  
やけどな。」太陽はそう言うてから、タバコの煙を吐き出すと、首  
を傾げるようにして少し笑った。

「でも、確かにそのくらいの頃は今と違ってもっと根拠のない自信  
ってあったよな。」

と、池ちゃんは太陽の台詞にゆっくりとした口調で同意した。

「俺は高校んときはプロのギターリストになれるって本気で思っ  
たな。」

と、池ちゃんはそう言うてから、苦笑するように軽く口元を綻ば  
せた。

「今からでも頑張ってみたら？」

と、わたしが適当なことを言うと、池ちゃんは軽く首を振って、  
「いや、無理やって。俺よりもギターの上手いやつなんていくらで  
もおるもん。」

と、答えた。

「そっか。」と、わたしは頷いた。

太陽は何も言わずに、黙ってタバコを吸っていた。

少しの沈黙ができて、その沈黙から音が溢れ出すようにして、周

まだ、雨はやまなくて。

困の物音がやけにくつきりと聞こえてきた。わたしたちが座っている後の席には大学生くらいの男女の集団がいて、何か面白いこともあったのか、そのひとたちが急にどっと楽しそうな笑い声をあげるのが聞こえた。

「・・・そういえば、吉田は今頃どうしてるんやろうな。」

と、しばらくしてから、太陽がふと思いついたように言った。

「そういえばなにしてるんやろうな。」

と、池ちゃんはぼんやりとした口調で太陽の言葉に同調した。

吉田くんというのは、わたしたちが大学のときにサークルで知り合った同い年の男友達だ。彼の将来の夢は小説家になることで、彼は大学を卒業したあと東京に出て、そこでアルバイトをしながら小説を書いていた。わたしはせっかく親しくなつた友人と離れ離れになつてしまふのが嫌で、小説を書くのはべつに東京じゃなくてもできるんじゃないかと思つて、彼にそう言ったのだけれど、彼は一度環境を変えてやってみたいという気持ちがあるし、それに東京には出版社もたくさん集まつてるからと言つて、結局、住み慣れた大阪を離れて東京にいつてしまった。吉田くんに会つたのは、去年かよちゃんとふたりで東京に遊びにいったときが最後だつた。今頃何をしているんだろうな、と、急に吉田くんのが懐かしくなつた。

「小説家にはなれそうなんかな。」

と、池ちゃんが誰に向かつて言うでもなく言った。

「一応、去年は小さな公募で賞取つたつて言つてたけどな。」

と、太陽はタバコの火を灰皿で押しつぶすようにして消しながら言った。

「それから何か進展はあつたんかな。」

「・・・やつぱ色々難しいんちゃう？」

と、太陽はいくらか気遣わしげな口調で言った。

「そうやるな。」と、池ちゃんは太陽の言葉に考え込むよう表情を

まだ、雨はやまなくて。

浮かべた。

「ねえ、今から吉田くんに電話してみいひん？」

と、わたしはふと思いついて言った。

「それいいな。」

と、太陽はわたしの提案にいくらか声を弾ませて言った。

「してみようや。」と、池ちゃんも微笑んで言った。

わたしはカバンのなかからケータイを取り出すと、吉田くんの電話番号を呼び出して通話ボタンを押した。すると、少しの間があって、呼び出し音が鳴りはじめた。呼び出し音が鳴り出したとたん、わたしはちよつと緊張した。彼が電話に出たらなんて言おうと、わたしは慌てて頭のなかにいくつかの台詞を準備した。久しぶり。元気？今何してるの？今、太陽と池ちゃんと一緒におるんやけどな。。。

でも、いくら待っても電話は繋がらなかった。吉田くんは電話に出なかった。

「つながらへんの？」

と、太陽がわたしの顔を見て言った。わたしはケータイを耳にあてたまま頷いてみせた。

「バイト中なんちゃう？」

と、池ちゃんは言った。

だいたい十回目くらいの呼び出し音が鳴ったところで、わたしは諦めて電話を切った。

「でも、今もう十二時ちよつと過ぎてるぞ。」

と、太陽は自分のケータイの画面を見つめながら納得できないように言った。

「深夜のバイトやってるのかもしれないやん。．．もしくは寝てるかな。」

まだ、雨はやまなくて。

まだ、雨はやまなくて。

と、池ちゃんは太陽の言葉にちよつと考えてから答えた。

「またあとでかけ直してくるやる。」

と、池ちゃんはなんでなさそうに言った。

「そうやな。」と、太陽は池ちゃん言葉に頷いたけれど、なんとなく吉田くんが電話に出なかつたことが気になる様子で、もう一度何かを確認するようにケータイの画面に視線を落としていた。

わたしも気になってもう一度ケータイの画面を確かめてみた。ひよつとしたら今この瞬間に彼が電話をかけ直してくるんじゃないかと思つたけれど、でも、ケータイは鳴らないままだった。・・・なんとなく、彼と、吉田くんと電話が繋がらなかつたことが、気になつた。吉田くんはほんとうに池ちゃんの言つとおり今寝ているのだろうかと思つた。ひよつとして彼に何かあつたんじゃないかと、わたしはよくわからないままに不安な気持ちになつた。

程なくして、わたしたちが注文した料理は運ばれてきた。料理は不味くない代わりに美味しくもなかつた。わたしたちはどちらかというと口数少なく料理を食べて、食べ終わるとすぐに店を出た。

店を出ると、時刻は夜の一時を少し回ってしまつていた。雨はまだ静かに降り続いていて、街灯の白っぽい光が、その冷たいいつもの雨粒を夜の暗闇のなかに淡く浮き上がらせていた。もう季節は四月の半ばだというのに、すごく肌寒くて、春なのに、まるで冬のはじめみたいだな、と、わたしは思つた。

まだ、雨はやまなくて。

わたしたちが思うこと。

「わかちゃんは今仕事なん？」

太陽がその口を開いたのは、車で池ちゃんを家まで送り届けあとしばらく経つてからのことだった。太陽とわたしの家は結構近いのだけれど、池ちゃんの家は少し離れた場所にあつて、家の遠い池ちゃんの方から先に送っていくことになったのだ。

「うん、明日も朝から仕事やで。」

と、わたしは運転している太陽の横顔に視線を向けて答えた。すると、太陽は軽く口元を綻ばせて、「明日仕事やのに誘って悪かったな。」と、いくらか申し訳なさそうに言った。

「べつにそんなことないで。」と、わたしは曖昧に微笑んで答えた。「太陽と池ちゃんに会うのは久しぶりやったし。それに、明日行けばまた休みやし。」

「そつか。それやつたらいいんやけど。」と、太陽はわたしの言葉に曖昧に笑って頷くと、それから少し間をあけて、「でもほんまになかなかみんな会われへんようになったよな。」と、静かな口調でポツリと言った。

「そうやなあ。」と、わたしは太陽の言葉に頷いた。

「昔は時間ならいくらでもあつたんやけどな。」

と、太陽は軽く笑いながら言った。

わたしは曖昧に微笑して同意した。

「といつても、いま俺は無職やから時間はあるんやけどな。」

と、太陽はそう言ってから自嘲気味に少し笑った。

まだ、雨はやまなくて。

わたしは彼の言葉に少し笑ってから、

「最近はいつも何してるの？」

と、なんとなく尋ねてみた。すると、彼は、

「今は毎日図書館に通って本読んでるな。」

と、ちよつと照れくさそうに微笑みながら答えた。

「そうなんや。」と、わたしはちよつとびっくりして言った。彼は大学の頃、どちらかというとなんてまったく読まないタイプの人間だったのだ。

「どうしたん？急に？」

と、わたしがいたずらっぽく笑いながら言うと、太陽はわたしの問いにいいわけするように少し笑って、

「せつかく時間があるんやし、この機会に本でも読んでこうかなあつて思つてな。」

と、答えた。

「そっか。」と、わたしは頷いた。

「あと、吉田の影響もあるかな。」

と、太陽は少ししてから付け足して言った。

「吉田くん？」と、わたしは少し疑問に思つて訊き返した。すると、太陽はわたしの言葉に軽く頷いてから、

「昔、吉田が面白いつて言つてた小説のことを思い出してな、それで暇やし、なんとなく読んでみようかなつて思つてな。」

「いい心がけやん。」

と、わたしがからかうように言うと、太陽は照れくさそうに曖昧笑つただけで何も言わなかった。

まだ、雨はやまなくて。

夜の一時を過ぎてしまった車道にほとんどの車の姿は見られなかった。街頭の淡いオレンジの光が寝静まった町並みは静かに照らし

出していた。そんな雨に濡れた町並みを見つめっていると、何がどうということもなく、少ししんみりとした気持ちになった。冷たい雨に濡れた夜の街の光が、視界を通して心の中にすうつと染み込んでくるような気がした。

「この前、春に咲く花っていう小説を読んだんやけどな。」と、しばらくしてから、太陽はふと思いついたように言った。わたしは窓の外に向けていた視線を太陽の横顔に戻した。

太陽はわたしの顔にちらりと視線を向けると、再び視線を前方に戻しながら、「わかちゃん、雪野透子っていう作家知ってる？」と、訊いてきた。

「わからへん。」と、わたしちょっと考えてから首を傾げるようにして答えた。わたしは本を読むのは嫌いではないけれど、かといって熱心な読書家ではなくて、流行の小説を読むくらいのもだったから、流行作家の名前か、もしくは古い大御所の、たとえば夏目漱石とかくらの作家の名前しかわからなかった。

「それって有名なひとなん？」と、わたしが試しに訊いてみると、太陽は軽く首を傾げるようにして、「いや、俺もよくわからへんねんけどな。」と、苦笑するように少し笑って、それから、「とにかくな、この前図書館にいったときに、たまたまそのひとの本を見かけて読んでみたんよ。」と、太陽は話を続けた。

「それでな、そのひとの小説がめっちゃ良くてな・・・良っていうか、考えさせられたっていうか、印象に残ったっていうかなあ・・・」

「どんな話なん？」

と、わたしは気になって尋ねてみた。

まだ、雨はやまなくて。

すると、太陽は、「一口で説明するのはちょっと難しいんやけどな。」と、少し困ったように笑ってから、物語のあらすじを簡単に話して聞かせてくれた。

太陽の話によると、その春に咲く花という小説は、戦前の日本を舞台にした小説みたいだった。主人公は若い女の人で、その女の人には敬愛するお兄さんがひとりいる。彼女のお兄さんはとても優しいひとで、美術大学で絵を学んでいる。でも、徐々に戦況は厳しくなっていて、やがて学生である彼女のお兄さんも徴兵されて満州の戦場に行かなければならなくなる。

彼女のお兄さんは戦場に行つてからも、妹にあてるときどき手紙を送ってきてくれていたのだけれど、あるときからパツタリとその手紙が届かなくなってしまう。

主人公の女のひとは兄が死んでしまったんじゃないかと不安に思いつながら毎日を過ごしているのだけれど、果たしてその予想は的中して、やがて彼女のもとにお兄さんが満州で戦死したという知らせが届く。

彼女はその事実を知つて、悲しみにくれるのだけれど、その悲嘆に暮れている彼女のもとに、ある日、届くはずのないお兄さんからの手紙が届く。

主人公の女のひとは兄が戦死してしまったというのは何かの間違いで、実はまだ兄は生きていたんだと嬉しく思って、慌ててその手紙を開封する。

まだ、雨はやまなくて。

でもその手紙を読んでいくうちに、それは彼女のお兄さんがまだ亡くなる以前に出した手紙だということがわかる。戦況が悪化したことで郵便がスムーズに届かなくなり、一ヶ月以上前に出した手紙が今になってやっと届いたのだ。

手紙には、一厘のきれいな花の絵が同封されていて、その花は、寒い満州で、春になると一番最初に咲く花だということが、手紙の文末に付け加えるように書かれてあった。

・戦争が終わってだいぶ月日が流れてから、主人公の女の人はその花を実際に見てみるために、かつてお兄さんが戦死した地方を訪ねていく・・・太陽の話によると、だいたいそんなふうなことが書かれた小説であるみたいだった。

「・・・なんかちょっと哀しい話やな。」

と、わたしは太陽の話の聞き終わってからそう感想を述べた。

太陽はわたしの言葉に頷くと、何かを考えるように少しの間黙っていたけれど、やがて、

「こういう物語を読むと、どうしても運命とかそういうことを考えてしまうよな。」

と、静かな口調で言った。

「運命？」と、わたしは太陽の言葉を繰り返して言った。

太陽は、「だってな。」と、言うのと、前方に視線を向けたまま言葉が続けた。「だってな、戦前の日本に生まれてしまったら、否応なく戦場にいかなあかんやん。・・・そのお兄さんはほんとうは戦争になんて行きたくなかったやろうし、まだ死にたくなかったやろうし、絵が描きたかったやろうなあって思うと、なんか哀しいといつか、虚しい気持ちになるな。」

まだ、雨はやまなくて。

そう言った彼の表情は、街灯の淡いオレンジ色の光のせいか、少し哀しそう映った。

「・・・俺たちはまだ今の日本に生まれたから、少しは自分の未来を自分で選択していくことができるけど、たとえば、北朝鮮の貧しい家庭に生まれたひととか、アフリカの食べ物ない国に生まれたひとたちはそんなことできひんやん。ただその日その日を生きていくだけで精一杯やったりするやん。・・・なんで世の中ってこんなに不平等にできてるんやろうなって思うな。」

「・・・確かにな。」と、わたしは彼の言葉に頷いた。

「そして俺らは世の中にはそんな恵まれない環境にあるひとたちがたくさんいるのを知ってるのに、そのひとたちのために何もしてへんやん。」

べつにそのひとたちのことがどうでもいいとは思ってへんつもりやけど、結局、究極のところでは、自分さえよければそれでいいと思ってしまうている自分があるような気がしてしまっただけ・・・

そのひとたちのために自分に何ができるかを考えるよりは、自分の興味のあることとか、物欲とか、そういうことばかり考えてしまっている自分がいてな・・・それでそんなふうに変え出すと、だんだん色んなことがよくわからへんくなってくるっていうか、自分がすごく汚い人間のように思えてきて嫌になるな・・・。」

わたしは黙って太陽の言葉に耳を傾けながら、でも確かに太陽の言うとおりかもしれないな、と思った。

そんなあからさまに自分さえよければそれでいいと思っっているつもりはないし、基本的にはみんなが幸せになれたらいいなと思うけ

まだ、雨はやまなくて。

れど、でも、究極のところでは、やはり、自分さえよければ、自分にとって身近な、親しいひとたちさえ幸せであればそれでいいと思っ  
てしまっている自分があるような気がした。

わたしはひとのために何かできることをするよりは、どうやったら自分がもうちょっと幸せになれるかと、日々に対する不平不満だとか、恋人と別れて哀しいとか、そういうことばかり考えてしまっ  
っていて、世の中の、わたしなんかよりももっともつと苦しい立場におかれたひとたちことをかえりみたことなんてほとんどなかったように思っ  
た。

そしてそのことに気がついた今この瞬間にも、そのひとたちを救うために積極的に努力していこうとは思えない自分がいて、そんな自分は最低かもしれないと思っ  
た。少し後ろめたい気持ちになった。

でも、同時に、そんな自分はどうしようもないとも思っ  
た。わたしはもう、自分のことだけで精一杯なのだ。どうすればいいのか、どうすることが正しいことなのか、わたしにはよくわからなかつ  
た。

「・・・とにかく、その小説を読んで色々考えさせられたな。」  
と、わたしがぼんやり自分の思考のなかに沈んでいると、となりで太陽が話に区切りをつけるように言っ  
た。それから、太陽は横目でこちらとわたしの顔を見ると、「全然関係ないんやけどな。」と、  
いくらか改まった口調で言っ  
た。

「その図書館の出入り口にな、めっちゃ綺麗な絵が飾ってあるんよ。」と、太陽は言っ  
た。  
「花の絵でな、多分水彩画やと思うんやけど、きれいな水色の花の絵でな・・・それでさっき言っ  
た小説のせいかな、めっちゃその花の絵が気になっ  
てな。なんとなく、その花が、小説のなかにでてくる春

まだ、雨はやまなくて。

の花のような気がしてな……。」

「誰か有名なひとが描いた絵なん？」

と、わたしが尋ねてみると、太陽は、「いや、俺もよくわからへんねんけどな。」と、首を傾げるようにして答えて、「でも、小さな図書館に飾ってある絵やし、そんな有名なひとの絵じゃないと思うで。」と、少し自信なさそうに答えた。

「絵の下に名前が書いてあって、たぶん女の人やったと思うけど、ちよつと忘れてしまったな。」と、太陽はそう続けて言ってから苦笑するように少し笑った。

わたしは太陽の言葉に曖昧に笑ってから、「また今度休みの日に、その小説と、絵を見に行ってみるわ。」と、言った。

「うん。まあ、気が向いたら見てみてや。」と、太陽は微笑んて言った。

その日、結局、吉田くんから電話がかかってくることはなかった。

まだ、雨はやまなくて。

## 青色の花とその想い

中学生のときに、わたしには仲の良い、たぶん親友と呼んでもいい友達がひとりいた。その子の名前は望みちゃんといって、わたしは望みちゃんといつも、何をするのも一緒だった。

わたしは中学校に入ってからテニス部に入ったのだけれど、そのテニス部の監督のことがあまり好きになれなくて、半年ほどですぐにテニス部をやめてしまった。そのあとは何をするということもなくぶらぶらしていたのだけれど、あるとき美術部に入っていた望みちゃんに楽しいから入らないかと誘われて美術部に入ることになった。

でも、入った動機が不順というか、あやふやなものだったので、部活には参加したり、しなかつたりで、いったとしても、それは美術をしにいくというよりも、美術部に入っているみんなと仲が良く、みんなと話をしにいくという感じだった。

でも、望みちゃんはそんなわたしとは対照的で、毎日放課後遅くまで残って絵を描いていて、ほんとうに絵を描くことが好きみたいだった。

絵のことはよくわからないけれど、わたしは望みちゃんの描く絵が好きだった。

彼女の絵にはみんなの注目を集めるような華やかさはなかったけれど、でも、その変わりに、ひと目見た瞬間に、心のなかにすうつ

まだ、雨はやまなくて。

と色彩が染み込んでくるような、たとえば夏の冷たく澄んだ川の水を思わせるような、涼やかで、透明な美しさがあった。

でも、なんとというか、その透明な美しさには、ほんの微かに、影のようなものがあって、だからそのせいか、望みちゃんの絵を見てみると、いつもほんの少しだけ哀しい気持ちになった。まるで遠くの、淡い色合いに霞んだ情景を見ているみたいに。透明な水に、一滴の青灰色の絵の具が零れてしまったみたいに。

今でも印象的に覚えているのは、望みちゃんとふたりで自転車に乗って、よく海を見に行ったことだ。わたしが生まれ育った小さな町は海のすぐ近くにあって、ときどき学校が終わったあとや、休みの日に、ふたりで自転車で乗って海を見に行ったりした。

防波堤沿いの道に自転車を止めて、ゴツゴツとした岩場を歩いていって、打ち寄せる波がすぐ目の前まで迫ってくるような大きな岩の上が上がって、ごろりとふたりで横になった。

目を閉じると、そのとき見た空の色や、海の色が、瞼の内側に浮かびあがってくるのだけれど、でも、どういうわけか、その空の色や、海の色は、（雨の日やくもりの日ばかりではなかったはずなのに）今にも雨が降り出しそうなどんよりとした天気イメージで、その暗い色彩に沈んだ画面のなかで、望みちゃんはこちらの方を振り返って、いくらか哀しそうな、何かを諦めるような微笑を浮かべている。

それはわたしが実際に過去に見た映像なのか、それともわたしの記憶が作り出したイメージに過ぎないのかはよくわからないのだけれど、でも、どうしても、望みちゃんのことを思い出すと、いつも彼女は悲しそうな表情をしていて、彼女の笑った顔や、楽しそうに

まだ、雨はやまなくて。

している表情を思い出すことはできない。

次の日の休みに、早速わたしは太陽が言っていた本と花の絵を見  
てみるために、家の近くにある図書館まで行ってみることにした。  
もう雨は上がっていたけれど、雨雲はまたいつ気が変わってもお  
かしくなさそうな顔をして空にとどまっていた。雨が降っても大丈  
夫なように、一応傘も持つていくことにする。

太陽が言っていた花の絵は、図書館の正面玄関をちょっとわきに  
それたところに、ぽつんとひとつだけ飾られてあった。

確かに太陽が言っていたとおり、それはとてもきれいな花の絵だ  
った。キャンバスの中央に、目に冷たいような淡い水色の花がどち  
らかというと物静かに描かれてある。わたしは植物を扱う仕事をし  
ているので、一応花の名前や種類については詳しいつもりであるの  
だけれど、でも、描かれている花はわたしのよく知らない種類のも  
のだった。

花の形からして百合の花に似ているような気がしたけれど、よく  
見てみると、百合でもなさそうだった。あるいはもしかすると、作  
者のまったくの想像で描かれたものなのかもしれない。でも、とに  
かく、その描かれた花の絵はとても美しく、じっと見ていると、  
あまりにもきれいすぎて、哀しくなってしまうような感覚すらあっ  
た。

まだ、雨はやまなくて。

そして、絵を見ているうちにわたしがふと思出したのは、望み  
ちゃんの絵だった。今日の前に飾れている花の絵と、望みちゃんが

描いた絵は、どことなく似ているような気がした。そう感じてしま  
うのは、絵の表面全体に微か滲んでいる、淡い青色の、少し物悲し  
い感じのする色彩のせいなのかもしれない。なかった。

絵の下に小さな紙が張ってあって、そこに絵の題名と作者の名前  
が記されてあった。「いつか雪が溶けたら 藤島静香 1979年  
没 享年二十歳」

太陽の言っていた「春に咲く花」という小説はなかなか見つから  
なかった。図書館に置いてある本を隅から隅まで見て回っただけ  
れど、それでもどこに置いてあるのかわからなくて、結局諦めて図  
書館のひとに訊いてみることにした。

わたしが本の題名と作者の名前を告げると、図書館のひとはちょ  
っと困惑したような表情を浮かべて、少々お待ちくださいと言つと、  
カウンターの奥の方についてしばらくの間戻ってこなかった。ひよ  
つとすると、題名や作者の名前を太陽から聞き間違つて覚えてしま  
ったのかなとわたしが不安に思いはじめていると、やがて図書館の  
ひとが少し息を切らせるようにしながら戻ってきた。

「すみません。お待たせしました。」と、三十代後半くらいの、小  
柄で、感じの良い女のひとはわたしに頭を下げると、最近図書館の  
本を整理したのだけれど、この本は利用者が極端に少なかったので、  
図書館の書庫にしまわれることになったのだ、と、説明した。

「いいですよ。そんな謝らなくても。」と、わたしがなんだか申し  
訳なくなつてそう言つと、彼女はどうぞと言つて、わたしに一冊の

まだ、雨はやまなくて。

本を手渡してくれた。

手渡されたのは白い装丁の本だった。結構古い本のようでカバーはついていなくて、表紙には本の題名と作者の名前だけが書かれてあった。思っていたよりも薄い本だったので、これだったら普段そんなに本を読まないわたしでもなんとか読み切れそうだなと安心した。

わたしが手渡された本をしげしげと眺めていると、「それ、ちょっと哀しい話だけど、でも、いい本ですよ。」と、図書館のひとはわたしの顔を見て微笑んで言った。わたしはありがとうと彼女にお礼を言うと、その本を一冊借りて帰ることにした。

本を借りるついでに、図書館の玄関に飾られている絵のことについて訊いてみようかなと思ったのだけれど、わたしの他にも数人のお客さんが並んでいて忙しそうだったのでやめておくことにした。

帰り間際にもう一度、わたしは改めて出入り口に飾られた「いつか雪が溶けたら」という題名の花の絵を見てみた。何度見ても、その絵はとても綺麗に感じられた。でも、綺麗だと思つると同時に、どうしても哀しみ似た感覚を感じてしまう。

この絵の作者はどうして二十歳という若さで亡くなってしまったのだろう、と、思った。病気だったのだろうか。それとも事故。わたしはふと死んだ友達のことを思い出した。

図書館を出ると、思い出したように冷たい雨がポツポツと降り始めた。

まだ、雨はやまなくて。

望みちゃんが死んだのは、中学校の卒業式の少し前だった。わたしも望みちゃんも進路が決まって、あとは卒業式を迎えるだけというときだった。

勉強のできる望みちゃんは、わたしたちの住んでいた地域のなかでも一番レベルの高い高校に進学が決まっていた。わたしの中学校のなかでその高校に進学するのは十人にも満たないくらいだったから、みんな望みちゃんのことをすごいねと言って褒めていた。先生も得意顔だった。わたしもそんな勉強のできる子を友達に持つたことを誇りに思っていたし、また同時に憧れてもいた。

でも、それにもかかわらず、望みちゃんはどこか浮かない顔をしていた。浮かない顔をしているというよりも、何か思いつめた表情を浮かべていた。

わたしは一度だけ、どうかしたの、と、望みちゃんに尋ねてみたことがある。でも、そのとき望みちゃんはいくらかきこちなく、寂しそうに微笑んだだけで、何も語らなかつた。

これはあとになって、望みちゃんが自殺してからわかったことなのだけれど、望みちゃんの家は両親の仲が悪くて、そのことで望みちゃんはずっと悩んでいたみたいだった。それから望みちゃんのお母さんが、いわゆる教育ママのような感じで、ほんとうは望みちゃんには美術の勉強が専門的にできる東京の高校に進学したいと思っていたのに、それを認めないで、一番の進学校に進むことを強制したみたいだった。

わたしは望みちゃんが自殺する前日、一緒に学校から家まで帰っ

まだ、雨はやまなくて。

ただけれど、そのときの望みちゃんはほんとうにいつも通りの望みちゃん、暗いところなんかひとつもなくて、むしろいつもよりもちょっと明るく感じられるくらいで、でも、今になって考えてみると、望みちゃんはそのときにはもう、死ぬことを決めていたのだと思うと、哀しくなるし、どうしてわたしはそのとき望みちゃんの気持ちに気がいてあげられなかったのだらうと悔しくなる。

望みちゃんは自宅の自分の部屋で首を吊ったみたいだった。それを見つけたのは、二つ年上のお兄ちゃんだったみたいだ。

望みちゃんのお葬式はとてもひっそりとした寂しいお葬式だった。お葬式の間中、小さなボリウムで望みちゃんが好きですと聞いていた「青色の花」という歌が流れていた。その歌を歌っているのは、世間的にはまったく無名の、インディーズバンドか何かの人たちだった。歌の内容は、暗闇のなかで希望をみつけようとする静かな歌だった。

確かそのとき、雨が静かに降っていたのを覚えている。三月の冷たい雨が淡々と降っていた。バスに乗って火葬場までみんなで行って、そのときみた火葬場の煙突と、その煙突から立ち上る、ぼんやりとした黒い煙のことが今でも忘れられない。望みちゃんのお母さんが声を上げて泣いていて、そのとなりで望みちゃんのお父さんが何度も何度も繰り返し望みちゃんに対して謝っていた。

今になって思えば、何も死ななくてもよかったんじゃないかってもっと違う選択肢だったであったんじやないかって思うのだけれど、でも、きつとそのときの望みちゃんは思いつめてしまっていて、苦しくて、冷静に何かを考えることなんてできなかつたんだらうなっと思っ。

まだ、雨はやまなくて。

まだ、雨はやまなくて。

だけど、確かに生きることとはときどき苦しいし、辛い。だから、少しは望みちゃんの気持ちもわかる気はする。これから先ずっと生きてそこに希望はあるんだろうかって不安になる気持ちはわかる気がするし、正直希望は必ずしもあるとは言えないのかもしれない。でも、それはでもひとは生きていかなくちやいけないんだと思って、だけど、ほんとうに自分はそう思うことができるのかと言うと、よくわからなくなったたりもして・・・。

まだ、雨はやまない。

雨が本格的に降りはじめたのは、わたしが図書館から家に帰りついてすぐくらいの頃だった。川の流れる音のような激しい雨音がアパートの外に聞こえた。

お腹が空いたのでとりあえずご飯を食べることにする。メニューは帰りがけにコンビニで買ってきたピサパンとドーナツだ。それと一緒にコーヒーを飲むことにする。

廊下に面にしてある小さなキッチンに立つと、銀の缶に入っているコーヒーの粉を紙のフィルターにスプーン一杯半くらい入れる。そしてそれをコーヒーメーカーにセットして、あとは水をコップ二杯ぶんくらい入れてスイッチを押す。

すると、少し間をおいてコーヒーメーカーが水を吸い込んでいくコボコボという音が聞こえてきて、そのあとにコーヒーメーカーから蒸気の吹き出る音とともにガラス瓶に抽出されたコーヒーが静かにたまっていく。

コーヒーのいい香りが部屋のなかに充満した頃くらいにコーヒーは出来上がって、それを昔から使っているお気に入りのマグカップに注いで部屋の方に持る。

出来上がったコーヒーは大変よくできましたという感じで、美味しいコーヒーを飲んでいると、少しだけ、嫌なことや、寂しい気持ち

まだ、雨はやまなくて。

ちを忘れて、ほっとくつろいだ気持ちになれる気がする。

ヴェランダの外に視線を向けると、青と黒を混ぜ合わせてそれを薄めたような色彩をした空間に、雨がくつきりとした白い線になっていくつも走っているのが見えた。

わたしはそんな外の景色と雨音を聞きながら、買ってきたパンを口に運んでいたけれど、なんだかやっぱり音がないと落ち着かないというか、心細いような気持ちになって、何か音楽をかけることにした。

とりあえずという感じでMDラジカセのプレイボタンを押すと、ながれはじめたのは、ずっと前にかよちゃんに借りてMDにダビングした小野リサのホザノバだった。最近家でゆっくりするということがあまりないので、以前聞いていたMDがそのままになっていくということが多いのだけれど、でも、コーヒーを飲むのにボサノバのゆったりした落ち着いた感じの音楽はちょうどいい感だった。心持さつきよりもコーヒーマンもパンも美味しくなったように感じられる。

昼食を食べ終わると、わたしは早速借りてきた本を読んでみることにした。本のどこかにこの本の作者の、雪野透子というひとのプロフィールのようなものが載っていないだろうかと思って見てみたのだけれど、どこにも作者に関する情報は記されていないかった。

このひとはまだ生きているのだろうか、それとももうずっと昔に亡くなってしまったのだろうか、ひよっとするともしかしてこの本の作者はあの図書館に飾られてあった、あの絵の作者なんじゃないかと変なふうに想像が膨らんで、たぶんそんなことはないだろうと思うのだけれど、でも、なんとなく図書館に飾られていた花の絵と太陽から聞いた物語のイメージが重なって、あるいはもしかすると

まだ、雨はやまなくて。

なんていうふうに考えているうちに、唐突に鞆のなかに入ればなししていたケータイ電話が鳴ったのでわたしの思考は中断された。

慌てて鞆のなかからケータイを取り出して着信を確かめると、それは吉田くんからの電話で、わたしが通話ボタンを押すと、耳元に懐かしい吉田くんの声が広がった。

「もしもし。わかちゃん？」と、吉田くんは言った。

「もしもし。」と、わたしは言った。

「久しぶり。」と、吉田くんは言った。

「久しぶり。」と、わたしも答えた。この前吉田くんが電話に出なかったとき、もしかして吉田くんに何かあったのかもしれないわけもなく不安になったけれど、でも、なんでもなかったのだと思っ  
てわたしは安心した。

「この前、電話くれたみたいだけど？」

「うん。」と、わたしは頷いた。「この前な、久しぶりに太陽と池ちゃんと遊んでん。それでな、なんか急に吉田くんに電話してみようって話になってな。」

「そうなんや。」と、吉田くんはわたしのしゃべり方につられて関西弁なつて頷いた。そしてそれから、

「ごめん。そのとき風邪ひいてずっと寝込んでたから。」

と、いくらか申し訳なさそうに言った。

そう言われてみると、吉田くんの声はなんとなく枯れているようにも感じられた。

「大丈夫なん？」と、わたしが訊くと、吉田くんは、なんとか、と答えて、苦笑するように少し笑った。

まだ、雨はやまなくて。

「ひとり暮らしだから、風邪ひくとほんと最悪なんだよね。全部自分でやらなきゃいけないから。それに今回の風邪はちょっとひどくて。二三日何もできなかった。」

「そっか。大変やなあ。」と、わたしは頷いた。わたしも一人暮らしをしているから、一人暮らしで風邪をひいたときの辛さはよくわかるような気がした。

「誰かおらんの?」

「誰かって?」

「風邪ひいたときに面倒みてくれるようなひと。」

「・・・残念ながら。」

吉田くんはそう答えると、自嘲気味に少し笑った。

「そっか。」と、わたしは曖昧に笑って頷いてから、

「誰か好きなひとかおらんの?」と、訊ねてみた。

すると、少し間があって、

「・・・いないこともないんだけど、まあ、なんか色々上手くいかなくて。」

と、吉田くんは歯切れの悪い答えた方をした。

「色々って?」と、わたしが気になって続けて尋ねると、

「色々だよ。」と、吉田くんは照れ臭いのか、答えたくないのか、濁すような返事をした。「いいなって思うひとにはもう他に好きなひとがいたりとかね。」

「・・・そっか。」と、わたしは頷いた。わたしが何て答えようと頭のなかで言葉を探していると、「それより、わかちゃんはまだ大丈夫なの?」と、今度は吉田くんが尋ねてきた。

「大丈夫って?」と、わたしは吉田くんの言葉の意味がわかりながらも尋ね返した。

「・・・加藤くんのこと。」

まだ、雨はやまなくて。

と、吉田くんはわたしに遠慮するように少し間をあけてから言った。

「それやったら、もう大丈夫やで。」と、わたしはかよちゃんのと  
きと同じ台詞を口にした。「最初は長い付き合いやし、すごく  
感情が乱れてしまったときもあつたけど、でも今は大丈夫。だいが  
落ちついてきた。」

「・・・そっか。」と、吉田くんはどう言ったらいいのかわからない  
のか曖昧に頷いた。それから、「でも、とにかく、元気だしね。」  
と、続けて言った。「何もしてあげられないけど、話聞くぐらいだ  
ったらできると思うし。」

「・・・ありがとう。」と、わたしは吉田くんの言葉に答えた。でも  
そう答えたわたしの声は、変なふうに震えてしまった。ひとに優し  
くされると嬉しいのに、声が、哀しみを含んでしまうのはどうして  
なんだろうと思う。

少しの沈黙があつて、その沈黙のなかに外に降る雨音が静かに広  
がっていった。

「・・・最近はどう?」と、わたしは訊ねてみた。

「どうって?」

「小説。書いてるの?」

「・・・うん。」と、吉田くんは頷いた。「ぼちぼち書いてるよ。」

「ほら、前、賞取つたつて言つてたやん。あれから何か進展はあつ  
たん?原稿の執筆依頼が来るとか?」

「・・・いや、そういうのはまだないけど。」

吉田くんはわたしの問いにちよつと困つたように軽く笑つてから、  
「賞取つたつて言つても地方の小さな賞だからね。それが直接何か  
に繋がるわけじゃないから・・・。」

「そっか。」と、わたしは頷いた。「やっぱり色々難しいんやね。」

まだ、雨はやまなくて。

わたしはそう答えながら、少し余計なことを訊いてしまったかなと後悔した。

「でも、小説は書いてるんでしょ？」と、わたしは続けて尋ねてみた。

「うん。」と、吉田くんは頷いた。

「今はどんな話を書いているの？」

「ん？え」とね、口で説明するのはちょっと難しいんだけど、花の話を書いているよ。わかちゃんがモデルなんだけど。」

「そうなんや。」と、わたしは少し笑って頷いた。

「自分がモデルなんてちょっと恥ずかしいな。」

「大丈夫だよ。悪いふうには書かないから。」

吉田くんもわたしの笑い声に誘われるように少し笑って言った。

わたしはふと大学生の頃のことを思い出した。街を歩いていたらばったり吉田くんとでくわして、そのあと繁華街から少し離れた場所にある、落ち着いて話せる小さな喫茶店に入ってふたりで話をしたことがあった。そのとき、吉田くんはこれから書こうとしている小説の話をしてくれて、わたしはその小説が完成したら見せて欲しいと言って・・・一体あれからどれくらいの歳月が流れたのだろうとふと思った。あのときからずいぶんたくさん月日が流れてしまったように思えた。

「・・・小説できたら、また読ませてな。」と、わたしは言った。

「・・・うん、またできたら、ぜひ。」と、吉田くんは頷いた。

「・・・そっちは雨降ってる？」と、わたしはなんとなく尋ねてみた。

「・・・降ってるけど、なんで？」

「いや、べつに。訊いてみただけ。」と、わたしは軽く笑って答えた。「こっちは今すごい雨降ってるから。」

まだ、雨はやまなくて。

「・・・雨、止むといいね。」と、吉田くんは言った。  
「そうかな。」と、わたしは頷いた。

吉田くんと電話したあとしばらくしてから雨はだいぶ小降りになつてきたけれど、それでもまだ雨は淡々と静かに降り続けてなかなか降り止みそうになかった。

わたしはふと心配になつてベランダの外に出てみた。ベランダで育てている朝顔が雨で駄目になつてしまつているんじゃないかと不安になつたのだ。

朝顔の芽はベランダの隅の方で雨にずぶ濡れになつていた。きつと気のせいなのだろうけれど、その朝顔の小さな芽は冷たい雨に打たれて寒さに震えているようにも思えた。わたしは心のなかで気がついてあげられなくてごめんねと謝りながら、彼女を比較的に雨に濡れない場所に移動させてやった。

それからわたしはベランダの手すりにもたれかかるようにして、目の前に広がる暗い色をした空を見つめた。いくらか小ぶりになつてきたとはいえまだ降りしきる雨がわたしの衣服を冷たく湿らせていった。けれど、構わずそのままだった。

思考のなかにとりとももなく様々な想いが泡のように浮かびあがつては消えていった。それはたとえば明日の仕事のことだったり、別れた恋人のことだったり、望みちゃんのことだったりした。それ

まだ、雨はやまなくて。

らの想いはちょうど世界の、濃い青色に、ほんのわずかに黒色を溶かしたような色素に染まっていた。目に冷たいような、哀しいような色彩に。

そしてわたしはふいに吉田くんの言葉を思い出した。彼が電話を切る間際に口にしていた言葉。雨止むといいねという言葉。それは希望に向かって解き放たれたささやかな祈りの言葉のようにわたしには感じられた。

ほんとうに雨が止んだらいいな、と、わたしは願うようにそっと思った。

まだ、雨はやまなくて。

まだ、雨はやまなくて。

PDF小説ネット発足にあたって  
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7815c/>

---

まだ、雨はやまなくて。

2009年7月1日21時21分発行